

日本酒で乾杯 推進会議 〈福島大会〉 開く

大震災、原発事故の痛手を吹き飛ばす、業界渾身の復興イベント



日本酒で乾杯推進会議の福島大会が9月24日の午後、会津若松市で開催されました(主催=日本酒造組合中央会/主管=福島県酒造組合/共催=会津若松市)。東日本大震災と原発事故の後遺症、そして風評被害という困難の中、日本酒業界が渾身の力で取り組んだ市民参加型の復興イベント。会津の空に、再生への祈りを込めた「日本酒で乾杯」の声が響き渡った一日をレポートします。



秋の夜空に開いた「鎮魂の大火火」

困難撥ねのけて開催。日本酒で繋がった福島県民の底力

● 日本人なら「日本酒で乾杯！」

ビールでもシャンペンでもなく、日本人なら「日本酒で乾杯！」—日本酒造組合中央会が取り組む「日本酒で乾杯運動」は、乾杯という行為を通じて日本酒、そして日本文化への愛と誇りを取り戻してもらおうという業界挙げてのキャンペーン。その中核組織である日本酒で乾杯推進会議では、運動の普及を目的に2006年から、毎年秋に各地で地方大会を開催してきており、今回の福島大会は岡山、山形、佐賀、札幌、奈良に続く6回目の取り組みとなります。

● 3.11の被災にも挫けず準備作業

福島県酒造組合では、今大会の開催に当って1年前から準備を進めてきましたが、3月11日の東日本大震災と、続く東電福島第一原発の事故により、県内の多くの蔵元が被災。混乱を極める中で、「イベントのあり方をはじめ大幅な企画の見直しを迫られることになった」（県組合の阿部事務局長）ものの、挫けることなく計画を建て直し、「震災からの復興イベント」として今回の開会にこぎつけたものです。

● 多彩なプログラム。一般市民も結集

さまざまな困難を撥ね退けて開幕した福島大会。当日は、台風一過の爽やかな秋空の下、第1部「フォーラム」（15:30～17:15）、第2部「山田流箏曲鑑賞」（17:30～18:00）、第3部「荒城の月大宴会」（18:15～20:30）と盛りだくさんのプログラムが繰り広げられましたが、中でも、鶴ヶ城本丸公園で開かれた「荒城の月大宴会」には、中央会、県組合関係者と一般市民およそ3000人が総結集。ライトアップされた名城・鶴ヶ城を背景に、震災からの復興と原発事故のダメージ払拭を祈って大乾杯式を挙行了のほか、様々なアトラクションや屋台出店などを織り交ぜて、活気みなぎる宴の風景を繰り広げ、日本酒を媒（なかだち）とした福島県民の絆と底力を強く印象づける大会となりました。



台風一過、絶好の乾杯日和



街のあちこちに復興へのメッセージが



フォーラムの会場となった会津能楽堂



荒城の月大宴会は鶴ヶ城本丸公園で

「会津酒魂～酒の道」をテーマに、談論風発のパネル討論

● 5人の論客が日本酒文化を語る

第1部の「フォーラム」では、2007年に竣工した会津能楽堂を会場に、コーディネーターの神崎宣武氏（民族学者）と、4人のパネリスト（会津松平家14代当主松平保久氏、福島県商工会議所連合会会長・瀬谷俊雄氏、JA福島中央会会長・庄條徳一氏、日本酒で乾杯推進会議運営委員長・西村隆治氏）が、「会津酒魂～酒の道」をテーマに、日本酒文化を語り合いました。



上の写真左から、神崎、松平、瀬谷、庄條、西村の各氏

● 東北の酒を飲み、東北と連帯しよう



討論に先立ち、日本酒で乾杯推進会議・100人委員会の石毛直道代表（国立民族学博物館名誉教授）が挨拶（左の写真）。この中で石毛代表は「今回の大震災は日本酒文化にも大きな打撃だった」とした上で、「酒には人々の連帯と友情を深め社会的孤立を解消する効用がある。いま私たちが東北の酒を飲むことは、東北との連帯を深め、孤立を防ぐことになる」と述べました。

● 日本酒の神聖、松平家の酒、乾杯運動の広がり etc.

パネル討論では、まず神崎氏が基調講演を行い（写真右）、「花道、茶道、剣道などと異なり酒道が成立しなかったのは、『酒は人知（道）を超えた聖なるもの』と認識されてきたからではないか」として、神酒奉獻の古式を今に伝える田島祇園祭などを例に、日本酒文化の根底にある神聖性を指摘。これを受けてパネラー各氏からは、酒を巡る松平家の家風や習慣（松平氏）、酒造産業の発展の方向（瀬谷氏）、稲作文化と酒の関わり（庄條氏）などについて発言があったほか、西村氏は会員数3万人目の乾杯運動の現状を報告し、取り組みの意義を訴えました。



● 第3部「山田流箏曲鑑賞」でリラックスのひと時

討論の後は琴の調べでひと息。参加者は、会津若松市の山田流箏曲演奏家・船木伊十矢さんが奏でる独奏曲（「みだれ」）や、尺八演奏家・穂積逸雪さんとの合奏曲（「赤壁賦」）に聴き入りながら、リラックスのひと時を過ごしました（下右の写真は船木さん〈左〉と穂積さん）。



夜空に轟く「日本酒で乾杯！」の声援、そして鎮魂の大花火



●「今宵は思いっきり乾杯して復興を祈ろう」(福島県・新城会長)

鶴ヶ城は土井晩翠作「荒城の月」のモデルのひとつ。この日のメインイベント「荒城の月大宴会」は、その鶴ヶ城本丸公園に会場を移して6時15分スタート。福島県酒造組合の新城猪之吉会長が「3.11大震災の後、会の開催を危ぶむ声もあったが、頑張っこの日を迎えることができた。いま県民は大変な思いをしているが、今宵は皆で思いっきり乾杯して復興を祈ろうじゃありませんか」と力強く呼びかけて、宴の幕を切って落としました。



●「福島県民の心意気に感動」(辰馬会長)

来賓挨拶では、中央会の辰馬会長が「困難にめげずこの会を開催した福島県民の心意気に感動している。過酷な環境の中で復興の道を歩んでいる人々に、一日も早く安寧の日々が訪れることを願ってやまない」と被災地を激励(ほかに福島県の内堀雅雄副知事と松平保久氏も挨拶)。



辰馬会長

松平氏

内堀副知事

● 地元ラジオ局とタイアップ、市内の居酒屋とも連携して一斉大乾杯



東山芸妓による艶やかな舞いを挟んで、いよいよ県民大乾杯式の時間に。音頭を取った室井照平会津若松市長(写真左)が「日本再生に向けて会津魂で頑張ろう。日本酒で乾杯！」と高らかに杯を掲げた瞬間、場内には参加者の唱和の声と拍手が湧き起こりました。また、この模様は地元ラジオ局を通じて放送され、市内の居酒屋各店でも時を合わせて一斉に乾杯が行なわれました。

● 県内 66 歳の地酒や地元グルメの屋台がズラリ

場内には、ライトを浴びて夜空に端正な姿を浮かべる鶴ヶ城を背景に、正面ステージ、予約参加者のためのテント席（定員 200 名）、当日参加者のためのテーブル席などが設けられたほか、県内 66 歳の地酒や、ソース串カツ、モツ煮込みといった地元グルメを楽しめる屋台が勢ぞろい(写真上)。



● アトラクションも盛りだくさん

ステージ上では、勇壮な鶴ヶ城太鼓の合奏や 66 歳のお酒が当たる抽選会、会津若松出身の歌手・越尾さくらさんのミニライブなどのアトラクションが次々に繰り広げられ、参加者も徐々にヒートアップ。越尾さんが、新城会長の依頼でこの日のために書き上げた「乾杯ソング」を披露した場面では、会津地酒とおつまみを手にした参加者が、ステージを囲んで写真を撮ったり手拍子を打ったり。会場は文字どおり宴たけなわの雰囲気(写真左)。



● 宴のフィナーレを飾った「鎮魂の大花火」

8 時半を過ぎて、大宴会もいよいよ大詰め。最後にお礼の挨拶を述べた新城会長は、「お酒はニコニコ楽しく飲みましょう。そして今日だけでなく、乾杯は日本酒で。福島はこれからも負けずに頑張っていくぞお！」と改めて復興への決意をアピール。続いて、今回の大震災によるすべての犠牲者の冥福を祈る「鎮魂の大花火」が次々と打ち上げられると、「いいぞー日本酒」「福島がんばれー」という参加者の歓声が夜空のあちこちにこだましていました。





日本酒で乾杯推進会議 福島大会 [2011.9.24 会津若松]

